服部兼三郎（はっとりかねさぶろう）

身に薄く、他に厚い人

－人材を育て、企業を遺した－

服部兼三郎（1870 ～ 1920）
出典：『KOWA100 年史』

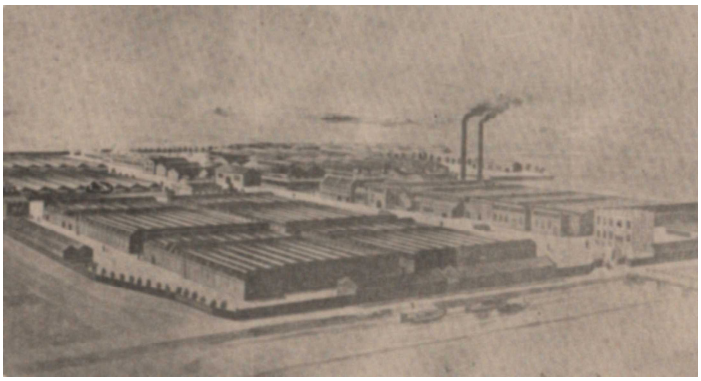
■その生涯

1870（明治3）年、服部兼三郎は、尾張国丹羽郡古知野（こちの）村（愛知県江南市）の堀尾家に堀尾兼三郎として生まれた。堀尾兼三郎は、名古屋の織物卸商・糸重商店で働きだして、当主祖父江（そふえ）重兵衛の眼鏡にかない養子となった。その後、祖父江の娘と結婚し、服部兼三郎となったが、道楽して放蕩（ほうとう）が過ぎて離縁、放逐された。

しかし、服部はその経験を生かして、1894（明治27）年、自らの名を冠した、織物卸問屋「服部兼三郎商店」を設立し、鳴海有松などの白木綿の卸販売を行った。また、1896年、豊田佐吉の木製小型動力織機を、貸織機工場へ大量導入して、安定した製品を作ることを心掛けた。

1912（明治45）年、服部は、個人商店を株式会社カネカ服部商店に改組した。先物で買って、実物で売る投機的取引を特徴としたが、相場変動の危険が大きいため、1914年より自社の紡績工場を持つこととし、紡績事業に進出、自社で綿糸紡績から織布迄の一貫生産を行う大紡績会社にそだてあげた。ところでこの年は、米騒動の起った年である。社会情勢と取引上不安から、服部は熱田港へ身を投げたこともあったが、この時は一命をとりとめた。

第一次大戦後の1920（大正9）年の繊維相場の大暴落がきたとき、綿業関係の暴落で、売掛金の回収ができない事態が起こった。この時、先物の暴落があり、服部は自社が倒産寸前だと思い込んでしまい、気弱になって、遺書を残して、自裁して果ててしまった。

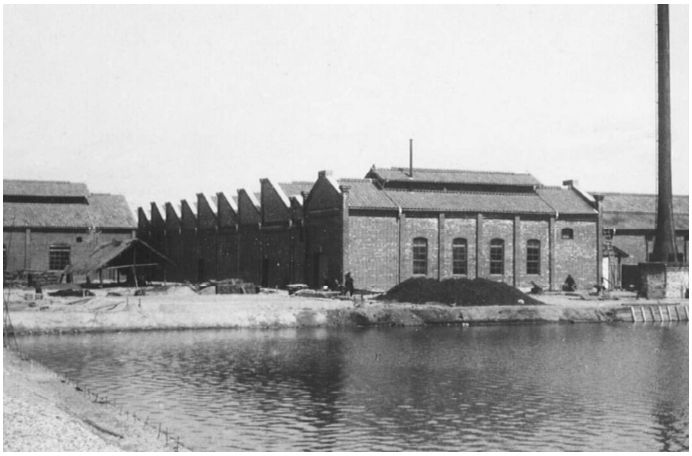


服部商店熱田工場全景　　出典：『中京名鑑』1928

■暖簾を守った遺書

服部兼三郎の遺書には、自身の保険金の半額で会社の欠損に埋め、残額を遺族に渡してほしいと書いてあった。この遺書は、服部商店の社員を振い立たせた。主人（服部）の死を無駄にしないために、社員は売掛金を回収するために八面六臂（はちめんろっぴ）とでもいうべく活動をして、会社を存続させた。危急に会って、会社に勤める社員から掃除夫に至るまで一致団結して「カネカ服部商店」を守り抜いた。

この皆が一心に働いたことは、社員を如何に大切にして育てていたかという事が良く判る逸話である。これは、「身に薄く、他に厚い人」であった、服部兼三郎の普段の心がけにおかげであった。



服部商店熱田工場　　出典：『KOWA100 年史』

■人を育てた無私の人

服部兼三郎は、死して、会社を残し、稀有の人材を残した。

豊田佐吉とは盟友であり、織機製作の資金援助を惜しまなかった。豊田佐吉の跡を継いで、豊田財閥のかじ取りをした、児玉利三郎と豊田愛子の仲人も務めている。また、トヨタ自動車の存亡危急の時に、大番頭と云われて、危急の経営を引き継いだ石田退三を育て上げた。この困難に打ち勝つという精神は、豊田喜一郎からトヨタ自動車工業を引き継いだ石田退三に受け継がれた。ある意味、服部兼三郎は、トヨタ自動車の育ての親の一人とも言えよう。

一番の人材育成は、親戚筋で、支配人の三輪常次郎を愛撫薫育に玉成したことである。三輪は、服部兼三郎の亡きあと、会社を、商売で得た資金を工業へ投資をする「商工兼営」を導入して、後の興和の礎を築いたと云える。

（杉山清一郎）

2022/10/13 改訂版